

造形・美術教育における環境教育の考察Ⅱ

福井 昭雄*

On the Study of Environmental Education in Art Education (No.2)

Akio Fukui

I. はじめに

学校教育における環境教育についての調査研究として、第1報では将来教育者をめざす大学生に、環境の問題に関する調査をし、環境問題への関心度や、図画工作や美術の授業での環境教育について、学生がどのような意識を持っているかを検討した。

本稿では、環境教育へのアプローチとして、自然に親しみ、その中で得た体験を通しての学習の重要性。自然と人間の造形的なかかわりの中で起こるさまざまな造形活動を、伝統文化や文化遺産の鑑賞や見直しを通して考察していくこと。生活の中での環境問題を造形・美術教育でどのようにとらえていくか等を考察し、この教科としての取り組みを、1. 自然との触れ合いの中で 2. ものとのかかわりから 3. 生活空間から環境空間へ、の三つの視点から考察し、一人一人の子ども達が、自から環境に働きかける学習となるように造形・美術教育の新たな課題として検討しようとするものである。

II. 環境教育へのアプローチ

1. 自然に親しみ自然から学ぶ学習

私たちを取り巻く環境は益す益す複雑になり、自然環境の破壊は地球的規模の環境問題として取り上げられている。

第1報の調査でも、「100年後の世界はどのようになっていますか」を絵で表したものは、将来に対して不安感のある絵を描いたものが全体の半数をうわまわっており、地球の温暖化や異常気象、大気汚染や核戦争による人類の滅亡を表したものが多くを占めていた。

「環境破壊で一番恐ろしいと思うものは何ですか」というアンケートでは、オゾン層の破壊、森林破壊、大気汚染などが上位を占めており、環境破壊の恐ろしさや環境保全への関心の高さをみる事ができた。

環境問題には、さまざまな原因が複合しており、問題解決としてはなかなかとらえにくいこともあるが、学校教育では各教科単位での学習だけでなく、複数教科の連携による総合学習や特別活動、課外活動など、さまざまな活動を通して学習していくことが必要であ

*ふくい あきお 文教大学教育学部

る。環境教育では、先づ自然に親しむことが大切で、子ども自からの自然体験を通して人間本来の生き方を学ぶようにしたい。

山や海、川などの自然環境や、雨や雪、風などの自然現象の中で、子どもたちが直接に見たり触れ合うことにより、自然の偉大さや、美しさ、恐ろしさなどを感じとりながら、その中で子ども自身の愛情や情緒、感覚や思考などが育てられていく。

動物や植物のように生きた自然は子供たちの関心を特に強くひき、初めは自己中心的な興味でかかわり合っていたものが、徐々に愛情を持って接するようになり、より具体的に認識しようとするなかで科学的な学習への芽ばえが始まる。

自然とのかかわりの中から、自然に感動し、共鳴し、自然と共生することの喜びを感じるようになる。自然を思いやる気持ちや、自然を愛する心を育てることが大切であろう。

2. 自然と人間の造形的なかわりの中で

人は自然とのかかわりの中で、さまざまな造形活動を行い歴史や文化を築いてきた。

アルタミラやラスコーの洞窟壁画に見られるように、自然の岩層や岩の隆起などから動物をイメージし、身近な材料や道具を工夫して描いており、それらは生き生きとした表現になっている。これらの洞窟壁画が人類の造形表現の中で最も古いものとされているが、造形表現の原点を示すものとして我々に感動をあたえる。

先史時代以来、自然の中にある無数の素材の中から、その目的や手段に適したものを選び出し“新しいもの”を作りだしていった先人の知恵には学ぶべきものが多く、伝統文化や文化遺産の鑑賞や見直しなど、地域や風土などと関連しながら学習していくことが必要であろう。

自然の素材に働きかけて作るものとしては、野焼きによる土器づくり、紙すきによる

和紙づくり、木や竹、藁などによる日用品や玩具づくりなどがあるが、材料の特色をうまく生かしたアイデアの独創性や発想の柔軟性を学ぶことができる。又、切る、貼る、結ぶ、組む、編む、織る、染めるなど、表現技術の修得にもなる。

身近なところにありながら忘れられてしまった伝統文化や文化遺産を新鮮な目でとらえなおして、子どもの日常生活とのかかわりの中で実践し、教材化していくことが必要であろう。

土、砂、水、木などの自然による原体験は、視覚や触覚などのあらゆる感覚を通して全身で感じとっていくことができる。土や砂を盛り上げて高い山を作ったり、溝や穴を掘って水を流すなど単純で素朴な遊びだが、おそらく古代の人もこうした遊びの中でいろいろなことを感じとり、発見し工夫しながらさまざまな“もの”を作っていたのであろう。

人間の造形表現は民族や時代の変遷により多種多様に展開されてきた、自然という大きな環境の中で創り出されてきた人間の造形的なかわりを伝統文化や文化遺産を通して学ぶべきものは多く、そこから新たな学習内容を考えていくことができる。

3. 生活の中での環境問題をとらえて

子どもの生活の中での直接体験は、さまざまな空間や時間の中で新たなものごととして捉えられており、いろいろな事物や事象にかかわりながら豊かな表現とすることができる。

造形・美術教育での環境問題を考えるときに重要なのは、子どもたちが自分の生活空間に目を向けることで、自分の住む町や地域の環境について学んだり、望ましい環境づくりを計画したり提案することであろう。それには自分が生活する部屋や家、クラスの教室や学校など身近な問題を取り上げながら、人と環境とのかかわりの中で起こるさまざまな問

題について学び、新たな課題を提案していくことが望ましい。

生活の中で起こる生産過剰と消費の問題や、それにとまなう廃棄の問題は、資源の有限性や、廃品や廃材を集めてのリサイクル活動など、消費者にとっても解決していかなければならない問題であるが、造形活動での資源の再生や、材料を無駄なく大切に使うなど、子どもがさまざまな材料と深くかかわりながらその子なりの表現をしていくことが、環境問題に主体的に取り組むための基礎的な力となっていくであろう。

こうした生活の中での身近な問題から、お互いが仲良く暮らすための共通の場の問題となり、都市化していく生活環境の中で、建築や公園など都市空間による総合的な学習も必要となってくる。

このように自分と環境とのかかわりの中で学習していくことは、豊かな感性や創造性を育てるこの教科の大きな役割であり、次の世代を担う子どもたちにとっても中心的な課題である。

Ⅲ 造形・美術教育での取り組み

1. 自然との触れ合いの中で

図画工作科として自然との触れ合いを中心とした内容に「造形遊び」があるが、現場では、その具体的な活動のあり方や指導、評価などで困難な問題点があるようだ。

「造形遊び」は、ともすれば消極的で自主性の乏しい現在子どもたちに、生き生きとした遊び体験を通して、柔軟な思考力や創造力、自主性や社会性など、人生の基盤となる素地を形成することや、あらゆる感覚を通しての造形表現の育成などが求められた。

そこには造形活動への契機となる手がかりとするだけでなく、自然へのかかわり方を重要なポイントとしている。

図画工作や美術での学習内容を環境教育の

視点から見直し、題材の内容やねらいを考えると。

① 森や川などの自然環境に触れて

・森の木になってみよう

木や草にさわったり、匂をかむなど五感で感じたことを身体で表現してみる。木や草になつての身体表現は新しい発想を生む手がかりとなる。

・秋の色を見つけよう

落葉を並べたり組み合わせて色や形の違いなどを見つける。落葉の山で全身で遊び感触を楽しんだり、身体につけて変身遊びなどをする。

・川原で石並べ

川原で石を並べたり積み上げる遊びや、浅瀬でのダムづくり、ささ舟を浮かべるなど、楽しい遊びはたくさんあるが、事故防止には十分気をつけなければならない。

・地球の声聞こえるかな

地面を素足で歩いたり、土や草の上に寝ころんでみると、暖かいとか気持ちがいいなど、今迄にない感想をもつ、地球からどんなメッセージがとどくかな、みんなで聞いて発表してみよう。

② 雨や風などの自然現象から

・雨で遊ぶ

雨が降りやむと幼児や低学年の子は、どろんこ遊びに興ずる。土手づくりや水の流れに興味はつきない。びんや缶などに落ちる雨の音の違いをみる音遊びも楽しい。

・風をつかまえよう

風のように見えないものを視覚化するのはむずかしいようにみえるが、紙テープやビニール袋、大きな布などで風の流れをみつけたり、つかまえることができる。風車、ふうりん、吹き流し、凧など風を使った遊びは古くからある。

・どんな音がするかな

風に揺れる木の葉の音や、小川のせせらぎなど、自然の音を聞いたり。草笛や木の実の笛の素朴な音に魅了される。吹いたり、たたい

たり、こすったり、はじいたりする音遊びから楽器づくりが始まる。

・雪や氷のアート

雪は丸める、積む、かためるなど、全身を使ってのダイナミックな活動ができる。落葉や草花を凍らしてつくる氷のペンダントや氷柱も美しい。

・台風や地震がきたら

災害をテーマとして教材とするには、むずかしい面もあるが、自然の恐ろしさをそれぞれの経験の中で思いだしたり考え合うのも大切なことである。

In SEA (国際美術教育学会) アジア地区会議東京大会 (1998年8月20日~24日・青山学院) での公開授業、森村学園初等部6年生(指導・辻克己先生)による「自然を五感で感じ表現しよう!」は、学園の園庭にある森の中で、木や植物に直接触れ合い、五感を通して感じとったものを、個々の選択によって平面や立体で表現しようとしたものである。

授業では森での体験を写真で掲示し、森の様子をビデオで公開しながら、個々のプランニングシートに従いながら材料をそろえ制作に入った。ここでは個別学習システムをとっており、自分で考えること、自分で計画すること、自分で材料を探すことなど12項目があり、発見したり、失敗したり、悩むことなどが掲げられている。

森での感動や創作したお話を絵で表したり、モダンテクニックやステンシルの方法でデザイン的に表現するもの、木の枝や葉などをコラージュしたり、立体的に組み立てたり、粘土で木を作り物語り性のある立体表現としているものなど、さまざまな表現が見られた。(写真1・2・3)

ここで重要なことは前時に行われた学園の森での体験学習であり、木や植物と子どもたちとの触れ合いの中でおこった、さまざまな出会いや感動がイメージとなり新たな表現へ

と発展している。

こうした自然との触れ合いによる研究として、第32回教育美術賞の「感性を培う『みる』授業の実践*1」いなば美育サークル。隅敦氏の「自然と共に*2」があるが、共に自然を素材とした実践が多く述べられている。

ここでは省略するが、植物や動物などの栽培や飼育による学習も是非取り上げなければならない内容であろう。

都市化の中で自然を造形学習の場とすることは大変むずかしい状況にあるが、子どもたちが自ら働きかけ、対応していくことができるような学習にすることが望ましい。

2. ものとのかわりから

乳児が乳首や哺乳びんを口でもて遊んだり、まわりの音に耳をかたむけるなど、周囲のものへ興味を持ち始め、手の動きや身体の行動が活発になり、運動機能が高まると、すべての感覚器官を働かせながら“もの”への探索が始まる。

木の葉や小石など自然にあるさまざまな素材や、身のまわりにある廃品などを並べたり、積み上げたり、組み合わせたりしながら子どもの想像力を働かせ、造形活動の基礎となる造形感覚や造形要素となるものを育てていく。

さらに、破る、切る、はる、つなげるなど、材料の特徴を生かしながら変形し、作り変えて新たな“もの”を作りだしていく。これらのことは、かつては遊びの中で体験しながら身につけてきたものだが、生活環境の中でそうした遊びが見られなくなり、造形遊びとして授業化せざるを得なくなった。

材料を大きく分けると、自然材と人工材とになるが、高学年では伝統文化や文化遺産などの鑑賞も取り入れながら環境にやさしい造形活動としたい。

・水で落書き

水を撒いて遊んでいる幼児がいる(写真4)

だが、よく見ると彼は園庭を大きなキャンパスとして絵をかいている。水でかいた絵は時間がたつと消えてしまうが、子ども達の自由な発想が全身を使っての活動としている。

・水の動きや反射から

ペットボトルやビニールホースを使って、水の流れや動きを見つける遊びや、水に反射した光をスクリーンに映したり、水の中に鏡や草花を入れて映すと、さまざまな映像を見ることができる。

・砂と遊ぶ

砂をカップに入れ、型抜きしたものを並べたり、(写真5)砂を掘ったり積み上げたりして大きな山やダムを作って遊んでいる。(写真6)素足になって砂の感触を肌で感じながら全身的な活動として楽しんでいる。

・草花や粘土、小石で何が出来るかな

空容器に草花や木の実、粘土などを並べてご馳走づくりをしている。(写真7)拾ってきた小石で面白い顔を作っている。(写真8)

・木の枝を切って

木を見ると幹の部分や枝のところに不思議な形を見つけだすことができる。木の枝を切って(写真9)釘を打ったり接着剤で接合しながら人形や動物などを作っている。(写真10)

・藁や枯れ草で

藁で作られた日常生活品は、最近では少なくなっており、手に入れるのもむずかしくなったが、藁や枯れ草などの造形も素朴で楽しめる。(写真11)

新聞紙を破いたり、ちぎったりしながら並べたり、身につけて遊んだりする。(写真12)新聞紙を丸めて長くつなげていくと線的な扱い方ができる。(写真13)

空き箱や空容器などの再利用としての教材化はさまざまな方法で行われているが、(写真14・15)それにとまなう廃棄の問題は環境教育の中でも最も必要としている。こうした実践に取り組んでいる橋本忠和氏の「造形教育とダイオキシン*3」(第33回教育美術賞)

は、これまで放置されていた重要な問題を子ども達と共に考え、実践している点に注目される。

氏の報告は、造形活動後にでる膨大なごみの焼却から、町におきたダイオキシン発生の環境問題と向かいあいながらこの問題に取り組んだとしている。河川の実態を調べての「水の造形」や、自然の中にある素材の活用、材料コーナー棚の分別など、環境にやさしい造形活動を目ざしての実践報告であり、造形教育こそ環境を守るとしている氏の今後の研究に期待される。

3. 生活空間から環境空間へ

子ども達が自分の住んでいる環境や、生活空間を認識したり、周囲の環境とのかかわり方を学ぶことは、よりよい生活をするために必要なことである。

自分が生活している部屋や家、教室や学校の整備や提案、自分が住む町や地域環境についても目を向け、地域の文化財の保護や見直し、地域についての幅広い学習があげられる。

・物の大きさや空間を測ろう

自分の手幅や歩幅で物の長さや、教室、校庭の周囲を測るなど身体を通しての物の大きさや空間感などを体験する。

・テープで区切る

紙テープやロープを使って教室や廊下、校庭などの空間を区切っていく。空間との新しいかかわりを体験し、区切られた空間感覚を味わうことができる。(写真16)

・町を探検しよう

自分が住む町はどのようになっているのだろうか、遊び場や通学路、駅や商店街など、自分流の絵地図をかいてみよう。

・都市化と環境デザイン

都市化は急速に進んでいるが、自然との共生の中で生活の場や環境形成を都市空間の環境デザインとして考えてみる。

前述のIn SEAアジア地区会議での、もう一

つの公開授業「環境・空間・変容・身体」(板橋区立上板橋第二小学校4年生・指導・辻政博先生)は、中庭に布やロープを使って空間を区切り、その空間の中で遊ぶというものだが。大きな布を引き裂いて細長い紐状にしていき、引き裂かれた色とりどりの布をロープなども使いながら周囲のポールや樹木に結びつけ、区切られた場所や布で覆われた空間の中で、子ども達は高さや広がりを感じ、くつろぎ、全身を使って遊んでいた。(写真17~21)

こうした空間での体験は、自分と環境とのかかわりを学ぶ上での基本的な課題である。

Ⅳ おわりに

環境教育への取り組みは、あらゆる教育活動を通しての展開が求められているが、造形・美術教育では自然との触れ合いや、“もの”とのかかわりによる直接体験を通して、それぞれの生活の中での環境問題として学習していくことができる。特に、一人一人の生活空間から環境空間への取り組みは、造形活動としても基本的な課題なので今後も考察していきたいと思う。

In SEAアジア地区会議での公開授業を行った子ども達が、世界各地から参加されている先生方の前で、長時間にわたり生き生きと活動している姿を見た時、この教科の重要性をひしひしと感じた。

○参考文献

- *1 いなば美術サークル「感性を培う『みる』授業の実践」(教育美術1997年8月号)
- *2 隅 敦「自然と共に」(教育美術1997年8月号)
- *3 橋本忠和「造形教育とダイオキシン」(教育美術1998年8月号)
- ・那賀貞彦 「環境芸術から環境教育へ」(美育文化 1992年1月号)

- ・岡田匡史 「環境問題と美術教育」(美育文化1992年1月号)
- ・阿部靖子 「美術教育における環境教育の意味とその視点」(美育文化1996年2月号)



①枝を切ってここにっけよう



④水で絵をかいちゃった（幼児）



②大きな木の中に動物がいてね



⑤砂をカップに入れて（1年生）



③本当の森みたいでしょう

▲In SEAアジア地区会議東京大会
（青山学院）
森村学園初等部 6年生
「自然を五感で感じ表現しよう！」



⑥大きな山だダムもつくろう（1年生）



⑦草花や粘土でご馳走づくり（1年生）



⑨木の枝を切って（4年生）



⑧小石で面白い顔（1年生）



⑩動物ができたよ（4年生）



⑪ワラで作った人（造形さがみ風っ子展より）



⑫新聞紙を破こう（幼児）



⑭廃材を使って（3年生）



⑬新聞紙を丸めて長くつなごう（1年生）



⑮街を作ろう（3年生）



⑯園庭をくもの巣の
ようにしよう
（かぐのみ幼稚園）



⑰ さあ布やロープをむすぼう



⑱ つまづかないようにとぼう



⑱ テントみたいだ



⑳ ひと休みしよう



㉑ In SEA アジア地区会議東京大会 (青山学院) 板橋区立板橋第二小学校 (4年生)
「環境・空間・変容・身体」